（前ページからつづく）

もらって意志統一し、自分たちもあらゆる行動をしたい。

いままで通りではダメなのだ

古沢委員（三川）の意見＝警官導入への抵抗という具体的な行動を通じて分会内にもいろいろな意見が出された。初めて機動隊のゴボウ抜きにあい憎しみがわいた。言葉上ではなく、実感としていかに不当であるかを知った。マス・コミのデタラメさに憤りを感じたなどだった。

これらの意見を通じて問題になることは、権力と独占一体の攻撃に憎しみを感じたが、これをどう会社に対する憎しみにするのか？　係員が逮捕を指示したなどという事実が、まさに企業への機動隊の直接介入ということだし、安保体制そのものへのにくしみにするのか。

第二に、みんなが一生懸命討議をつづけたことは、処分の意味を抜きにしては考えられない。今度の闘いを本当に持続的にたたかわなければ、組合をぶっつぶすという攻撃には耐えられないという緊迫感があったこと。

第三に、どんな討議をするにも、具体的なたたかいの経験からの討議をしなければ、真に生々したものにはならないことを教えたことである。

これらの討議の中から、いままで通りの行動をくり返していてはだめだ。本当に一人ひとりが決意をかためて、あらゆる方法をつくり出してたたかわなければならないことが意志統一された。

闘いの芽をつかむ

伊藤委員（四山）の意見＝六月九日以前は戦術上の批判もいろいろあったが、六月九日以降はもうそのような批判をのりこえて、どうたたかうかということが中心になってきた。まず、「四月二十八日の江上、井上問題で交流をしよう。転場要求、保安要求をつきつけていこう」ということになり、具体的には欠損、破損ワク、人員要求、保安などで要求項目をつくっていった。

四山でも直ちに鉱長室にかけこむということにはなっていないが、宮浦の問題をどう自分たちのものにしていくかという真剣な議論がつづいている。たとえば五分会では「今月のテーマ」「今週のテーマ」という形でたたかいの指標をかかげていくということもおこなわれている。四山でもみんな血まなこになった闘いがおきつつあるということだ。

そのような中で、宮浦から「退き方によっては敗北感しかのこらないのではないか」という言葉がきかされるのは残念だ。闘いは敵との闘いと同時に内部の組織化という面もあろう。四山の闘いは、たしかに不十分だが、内部の組織化の芽も出てきた。もし、「敗北感……」という言葉が宮浦（の中にあるとすれば、宮浦も四山の闘いをとらえかえしてもらいたい。

九日間、座り込みをつづけた者として

墨田委員（宮浦）の意見＝われわれは座り込みをつづけて闘ったが、三池労組全体がこの闘いをつつんでいく条件がないかぎり、勝利はしない。だから全組合員がつつんでくれという気持だった。しかし、全体にひろがるまでにはかくも時間がかかったことを考えれば、三池労組といえども分断されていたのかと思った。

ところで四月二十八日の宮浦鉱繰込場事件は、会社側の意図的な攻撃であった。江上、井上両氏が属する七分会は、退避訓練にしろ、岩粉撒布にしろ、三池闘争後はこと保安に関する問題には徹底して闘ってきた。だから会社は弾圧を仕組んできたのだ。「返事」ということは、たまたまそれを口実に会社がえらんできたにすぎない。

江上、井上両氏の解雇が強行されたときの処分反対闘争がもり上がらなかったことや、ストライキの規模が支部ごとにちがったことで、会社は三池労組をなめてかかってきた。第三回団交が三十分ぐらいで打ち切られたことをみても、それはあきらかである。解雇が強行されたときに、本当に徹底的に、大胆な闘いを組むべきではなかったのか？

しかし、私が本当に三本線だなと思ったのは、二人が逮捕まできされたときに三池労組の怒りが爆発したことだった。そして、そのときには逮捕も警官導入への恐れもふきとばして、そして内部の断層さえふきとばして一線になろんだ。宮浦を孤立させようという向こうの意図が、この統一闘争で完全にくずれ去った。

第二組合は昨年の座りこみのときは執行部は組合員をつれて挑発をかけてきたが、今回はそれはできなかった。そればかりか第二組合員の出勤率がガタおちし、宮浦の組合員を三川から帰したりしている。

会社は自分の力で座りこみを挫折させることはできなかった。これは明らかにわれわれの闘いの成果だ。会社が挫折させえなかったからこそ機動隊を入れたのだ。昭和三十五年以降石炭政策の中で安定的な位置を確立した三池が、われわれの九日間の闘いで挫折させられようとした。

だからこそ、会社はこれを契機に宮浦指導部をつぶそうとするだろう。だから係員が指名をし逮捕させ、そのようにして活動家を隔離してクサビを打ちこもうとしてくるだろう。十日間座りこんで統一と団結を固め、機動隊でしか排除できなかったことを確認し、体制を固め、あらゆる方法をつみ重ねていけば必ず勝利する条件があると思う。

いまこそ団結するとき

杉野委員（三川）の意見＝全山統一闘争をあくまでも追及し、実力行使には十分配慮をすべきだ。いまからの相手は機動隊ではなく、会社なので対決点はなにかを明らかにしなければならない。それは「どんな保安上のミスも見のがさない」という構えであり、いままでとはちがうきびしさを持たねばならない。その中から追い打ちはゆるさないという対決点をつくりだそう。

今後の闘いについては敵は巨大であるということ。三井と国家権力が一体となって攻撃をかけてくるという事実、独占資本の合理化政策は労仂運動そのものを許さないという巨大な力である。まず、われわれも力をひろげていくことが重要だ。いまこそ団結をかため、闘いの統一をよびかけよう。

話し合いの場の拡大を

今村委員（四山）の意見＝まず今回の闘いについての転場の意見は一、釈放された時点で座りこみはとかれなかったのか。

二、いまの三池労組では一人でも活動家がほしいのに処分された間は闘いができないのではないか？

三、主婦会は動員要員のようだ。などの意見がだされたが、今後の闘いの方向については全員で確認した。

その中でも転場闘争をどうすすめるのかということが今後の一番重要なことだが、まず、そのためにも話し合いの場所をどうひろげるかが私たちの場合重要だ。そのために転場集会では必ず出欠をとり、欠席するときは必ず届けでることを決めた。

COマスクについては必ず全員腰につけて仕事をする。もしどうしてもできない人は仕事場の近くにおこう。COマスクの重さで生命の大切さを知り、闘いをすすめようなどを決めた。

ストばかりが連帯ではない。一人ひとりが不屈に闘うことこそ

宮崎委員（四山）の意見＝私の転場では今回の処分と逮捕の問題で精いっぱい討議をした。あくまでも三項目、四項目を中心に宮浦を孤立させないぞということを全員で決意した。それなら私たちはどうするか？二四スト、時限ストと足なみがみだれたことが問題だということがいわれているが、はたじてストの足なみをそろえることばかりが宮浦と連帯することだろうか？われわれは転場闘争を徹底的に闘うことで連帯しなければならないと思う。

四山鉱はZD運動がとくにはなばなしく導入されているが、おれたちはこれに負けていない。この低賃金の中で二人も学校にやりながら、公休出勤は絶対拒否しつづけるという抵抗の姿勢を示しつづけている人もいる。これはたしかに活発に活動するというような人ではないが、これこそ十年間の抵抗闘争を水のアワにしないということだ。二四スト、時限ストを打つことだけが宮浦を孤立させないことではない。一人ひとりが転場で不屈に闘いつづけることこそ連帯だ。

CO闘争への発展を

阿久津委員（本所）の意見＝基本的には本部提案を支持するが、資本・権力の側の評価が甘すぎるのではないか。われわれが予想する以上にわれわれを弾圧しようとする側は計算し、計画してくることを知らねばならない。だから会社に内部矛盾があり、それをつくなどという甘い考えではいけない。

画一的にストを打てという意見がでているが統一闘争とは必ずしも画一闘争ではない。だからストライキの形態のちがいだけで内部の闘いを判断すべきではない。われわれが資本のそのような攻撃に、全労仂者の共感をえながら反撃をしてきたのはCO闘争であったし、いまもそう。この闘いをどのようにCO闘争に内容として結合するかが一番大切なことだ。しかし、それがまだ指導部の中では未整理だ。その整理を直ちにし、われわれの闘いの展望を明らかにすべきだ。

あくまでも正しい方向を向いて足なみをそろえていく指導を指導部にのぞみたい。

短歌　裁判所にて

筑紫　次郎

逮捕者を返せと叫ぶ人垣は護送車の小さき窓をふさげり

権力に飼はれし犬か民衆の声におびえる老裁判官

三池労組に残りし誇りかみしめて闘いの道永きを思う

〈随筆〉『黒いハイエナ』

K生

三階にあるその部屋は、殊のほかに蒸し暑かった。窓は西側にあるのみで、三方を分厚いコンクリートの壁と廊下に囲まれたせいでもあったが、それよりも身内に流れる激しい憤りと抵抗の身構えがひしめきあって座り込んだ仲間のスクラムから吹きあげてくるようで、玄関と言わず廊下と言わず、鉱長室を中心に埋めつくした仲間たちの熱気で、宮浦鉱の建物は地鳴りにも似たどよめきに支配されていた。

われわれは、計画的な繰込み時の挑発的陰謀の「ワナ」に捲き込まれて行った宮浦の仲間たちの行動の柔軟性の欠如を指差すものではない。あの時にわれわれが立たされたと仮定しても、やはり闘いへの道をひた走りしたに違いない可能性を十分個々の内部に持っていたと判断されるからだ。

薄暗く無気味な壁に荒々しい靴音が響き、探索灯の反射の中に映しだされた異様な権力の影をみたとき、われわれの戦意は期せずして、「ポリ公帰れ」のシュプレヒコールへと移っていった。無抵抗者の究極の武器は言葉と意思でしかない。それは必然的なものであり、人間的な行為なのである。笛があれば吹いたであろう。大鼓があれば叩きもしたろう。怒りに口を開けば言葉ともなる。言葉は意思であり、思想なのだ。権力はその真実性を怖れる。

古来「虎の威を借る狐」と言う諺がある。われわれが目撃した権力の実体は明らかに血迷い狂暴であり、好戦的であり、野蛮で粗野な数々の行為は、市井の暴力グループと何ら質を異にするものではなく、血を見らねば止まぬドウ猛な「ハイエナ」のそれであった。したがって犠牲者の続出をみたのは残念ながら必定であったのだ。

この獣性に律せられた「権力の威を借る「ハイエナ」の近代寓話を、いつかわれわれは次の世代に語り継がねばなるまい。

われわれが呪わしい汚れた手から突き放された時、黄昏近い時刻とは言え、宮浦広場の陽はまだ高く風さえあった。会社と結託した「排除」という名の権力介入が、如何に人間本来の自然性と基本権利への冒とくであることか。そして違憲行為を敢えて行使せざるを得ない資本主義社会のただれた傷口をマザマザとかがされ、佐藤内閣体制下の法治国家とは正に言う「ポツテントツト族」の他なにものでもないことを思い知らされたのである。権力が為政者の思うままに行使せられるものであるならば、権力とは実に不安定なものであり、たえず揺れ動く私兵的エネルギーでしかないのだ。人間不信、倫理不在の集団化したこの巨大なエネルギーを正しく浄化させるてだてはないものか。

こうかつな資本体制に課せられる限りにおいて、それは絶対に不可能なことなのであろうか。従属と真の独立への岐路に立つ七〇年の安保反対と祖国復帰の願いをこめる沖縄の闘いが苛烈な色彩の映像を伴い武装したこの「黒いハイエナ」の群れが重なってくるのを否定することが出来ない。さて宮浦砦の攻防は独善的勝利に酔う群狼に包囲され、静かに迫りよる夜の闇とともに終るかに見えた。少くとも第三者には……である。だがしかし、それは幻影に過ぎない。闘いはここから、いまから始まる。われわれは三池の旗を高く夜空に掲げて権力への抗議行動への前進を開始した。それは再び追及を許さず、責任を求め、保安と転場と命を守る闘いへのたゆまぬ行進であり、「ゼッケン」闘争に連らなる道でもあったことを愚鈍な私の頭脳はいまにして思いあたるのである。

「がんばろう」は連帯の挨拶だしかし私にはともすれば挫折しがちな自らへの叱咤の檄でもあり言葉ともなるのだ。

（三川指導部十一分会転場新聞「いのち」第二号より）

短歌　〝すわりこみ〟より　〝たぎる闘魂〟

作者不詳

ヘルメットはねとばしうつ殴るなぐるつく三井の番犬の正体を見き

スクラムくむ腕を踏みつけゴボウ抜きする獣めくこれが警官か

ほほより血噴き出し怒りのまなこあげ警官かえれと叫びつづくる